あさひの日だまり

令和５年　４月２８日（金）

NO.４

辰野町立辰野東小学校　文責　片桐

～校庭の石拾いをしました～

運動会へ向けて動き出しました

運動会の準備が始まっています。職員の分担も決まりました。練習も本格的に始まるということで、安全面を考えて校庭の石拾いをしました。日常的に使っている校庭ですので、それほどの量の石はないだろうと思っていましたが、全校で集めると結構な量の石が集められました。

校庭の準備に取り組んだ子供たちの心の中で、運動会への期待も膨らんでくれたらいいなと思います。

今年度は、コロナ感染の前の運動会へ基本的に戻そうと思います。

ただ、まったく同じ形に戻すのではなく、以下のように考えています。

以前は、地域の方も一緒に協議に参加するのが「あさひの運動会」でした。そのことで地域の中の学校という大切な役割を学校がいただいていたことになるのだと思いますが、これを機会に、時間を短縮することで、子どもたちが集中して自分たちの競技に打ち込めるようにしてあげたいと思います。大変申し訳ありませんが、地域の方と保護者の方が参加する種目を削らせていただきます。

運動会の主役は子どもたちです。子どもたちが一生懸命競技に取り組んだり、応援したりしている姿を目にすることで、同じグラウンドにいるご家族や地域の方が感動したり、楽しんだり、喜んだりしてもらえることを大切にしたいと思います。

当日の応援には人数の制限は設けません。近所の子どもの応援に駆けつけていただいても結構です。親戚の方の応援も歓迎です。どうぞ、ご理解いただき子どもたちに温かな声援を送っていただけますようお願い申し上げます。

～参観日へのご来校に感謝いたします～

PTA 総会が久しぶりに行われました

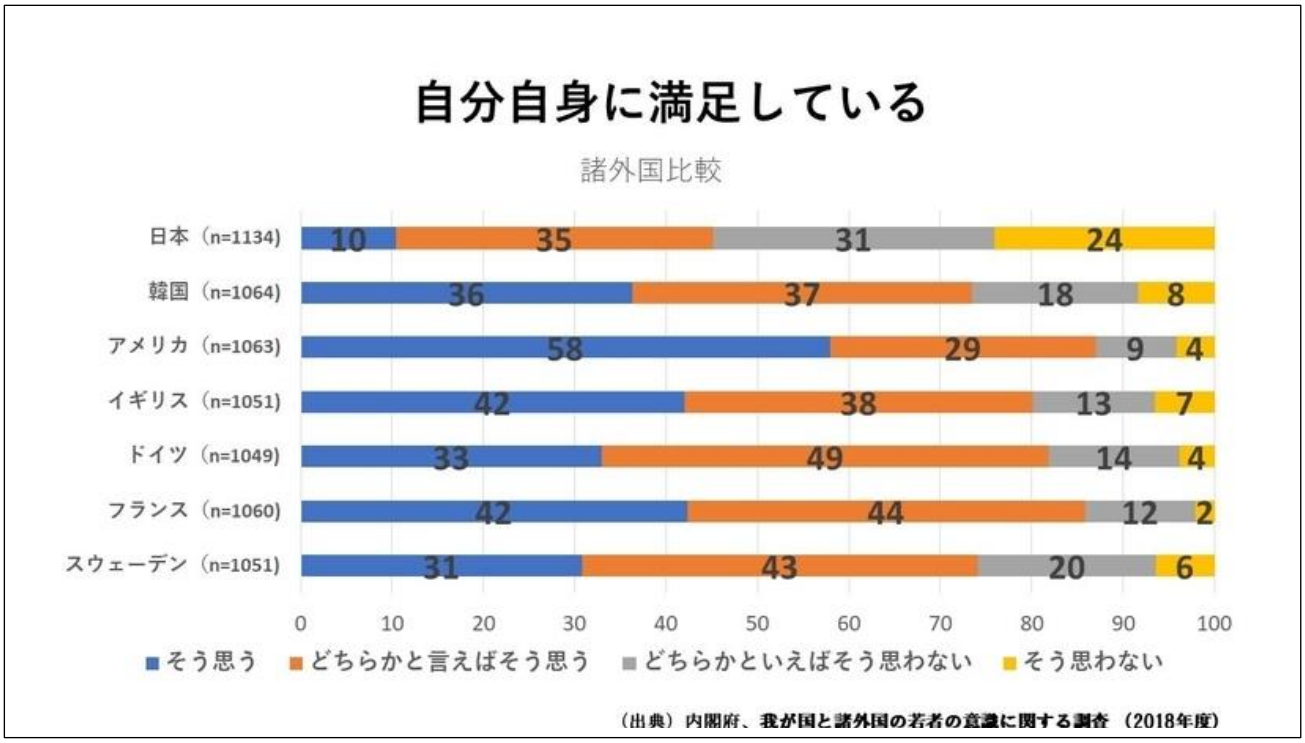
感染防止のために、昨年度は学校を終日開放し、保護者の皆様の密をさけての参観日を実施してきました。今年度は、コロナ以前の参観日・学級学年懇談会・PTA 総会に戻します。ただ、PTA による歓迎会は、１００名規模の宴席となることから、もうしばらく様子を見ることとさせていただきました。年度末にはぜひ会を開けることを願っています。

参観日後の会で、校長からご家庭の皆様へお話をする機会がありました。年度当初にどんな話をすればよいか思案しましたが、今回は、今年度学校が大切にしたいことをお話しすることがよいだろうと考えました。話の内容を掲載させていただきます。2 番煎じで大変申し訳ございません。お許し下さい。

皆様にお話をする時間がいただけましたので、今日は「自己肯定感」についてお話ししようと思います。自己肯定感とは、自分の価値や存在意義を肯定的に捉えられる感情のことです。「私って色々といいところがある」「私の生き方は素敵だ」「自分自身に満足している」といった感情のことだと思います。この気持ちが身についていると、「よし、新しいことに挑戦しよう」とか「この問題に挑戦してみよう」というエネルギーが自然とわき出てきます。新たな挑戦は、自分でも気が付いていない隠れた能力を引き出し、未知の自分と出会うチャンを与えてくれます。

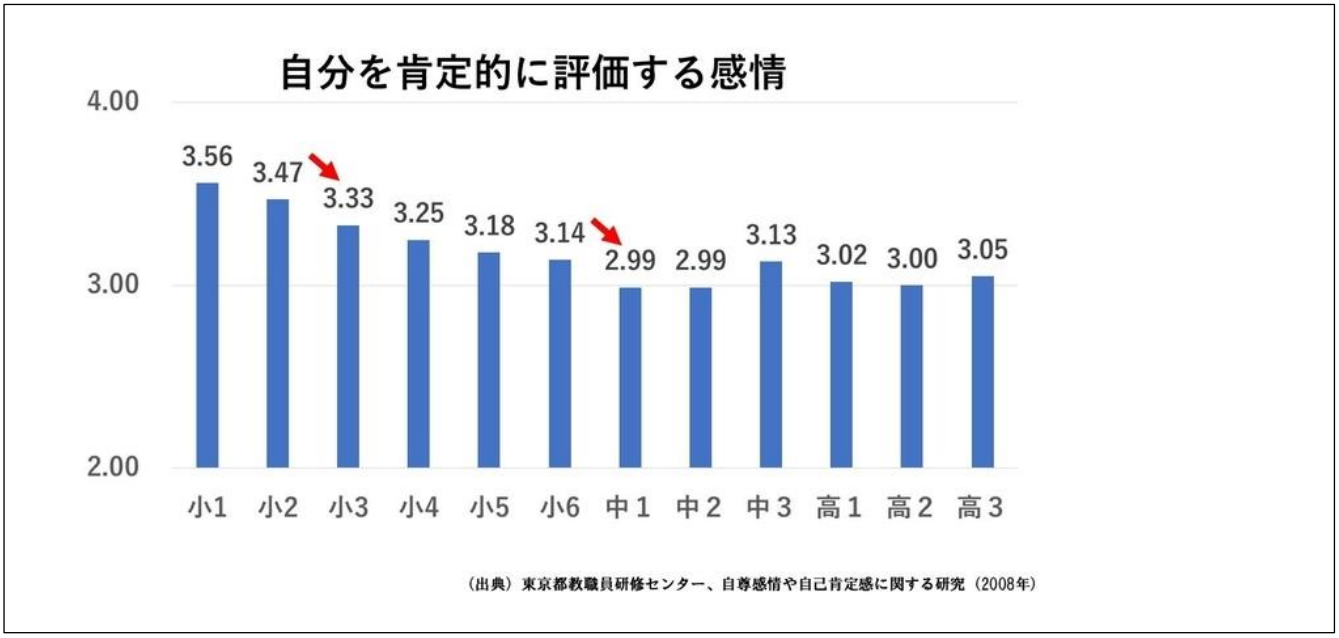
私は、この「自己肯定感」がとても大切だと思っています。

13歳から29歳までを対象に「自己肯定感」に関して調査した結果があります。



日本人の４５パーセントの青年がまあまあ自分に自信を持っていると言えます。もっとも高いアメリカは７３パーセントです。アメリカの青年はチャレンジ精神に富んでいるということになります。私は、このグラフを見て、日本人の「自己肯定感」の低さに不安を感じます。

それでは日本人の自己肯定感はいつ頃から下がるのでしょうか。下のグラフをご覧ください。



なぜ日本ではこういう現象が起こるのかな～と思うんです。要因はいろいろあるのだろうと思うのですが、私の家を例にお話しします。私の思い込みかもしれませんがお許しください。

私は、自分の子どもに「お前はすごいな」という声がけをした経験があまりありません。どちらかというと「こんなことやっていたら、大人になって困ったことになるぞ！」「前も同じ事言ったじゃないか、進歩がないな～」という言葉をよく使った覚えがあります。

この言葉にはなんだか、「大人になって困らないように、子どものころからちゃんと準備をしなくてはいけない」という意味が込められているように思います。大人になるために、子どもは、ここまではできるようになっていなく

てはいけない。そんな目に見えない大人の価値観の目標値が設定されているように感じるのです。そして、そこに到達していないと「心配な子」と周囲から評価されるわけです。全否定ではなくても君の一部分はダメだね。と言われる場合もあるかもしれません。それも同じことです。

このような言葉を注がれて育った子どもは、いつでも「自分に足りないところはどこだろう」「それを補うにはどうしたらいいだろう」と自分の負の部分を探す心持を抱えているように思うのです。そういう心の中から「今の自分はそのままで素敵な自分だ」という自分に対する肯定感はなかなか生まれてこないように思います。

既に社会人になっている私の子どもは、自分の進む道の選択に不安を感じたとき、必ず妻に電話で相談してきます。妻も親身になって相談にのってあげています。それはそれで大切にしなくてはいけない親子関係なのだと思いますが、もしあの頃「お前なら大丈夫。自分で決めて自信をもって進んでごらん」と言ってあげていたら今どうなっていたかと思うときがあります。

私は、子どもの時代は大人になるための準備段階ではないと思っています。どの子にも子どもの時代の大切な時間があり、大人になれば大人になって大切な大人の時間があるのです。

大人になるために子どもの時間があるわけではありません。だから、大人の価値観で子どもをみてはいけないのです。

家に帰って「あなたの良いところはどこだと思う。３つあげてごらん」と問いかけたら、お子さんは自分の素敵なことを３つ答えられるでしょうか。「ぼくは、私はこういうところがいいところだと思っている」「こういうところには自信がある」と答えられたらいいな～と思うんです。

大切なのは「あなたのそういうところがいいところだよね」と周囲から語りかけられてきたかどうかということです。そういうシャワーを浴びながら育ってきたお子さんは即座に自分の良さを答えるでしょう。

子どもたちは、自分の短所は挙げられますが、長所はなかなかあげられないものです。これはどう考えてもおかしなことです。

私は子どもたちに「生きてるって楽しい」と感じて欲しいと願っています。そのためにはどうしても自己肯定感が必要なのです。

自己肯定感は自分に対する自信と結びついています。自分に自信があると、何かにチャレンジしたいという気持ちがわき出ます。何かに挑戦すると、充実感と満足感が生まれます。それは、結果が失敗に終わったとしても同じです。充実感と満足感が「生きているって楽しい」という気持ちを生みだしてくれると思っているのです。

本年度本校では、めざす子どもの姿を「新たな挑戦を試み、人生を楽しみながら歩む子ども」としました。

私たち本校職員は、子どもがみせてくれる素敵な姿に目を向け、「あなたのそういうところがいいところだね」と声がけしていきます。そして、そういう素敵な姿が表現できるように、挑戦の舞台をできるだけたくさん用意したいと思っています。

先ほどの話に戻ります。どうぞ各ご家庭でも、お子さんの良いところをたくさんほめてあげて下さい。本校の子どもたちは、自分の良いところをすぐに答えられるような子どもであってほしいと願っています。ご家庭と学校が手を取り合って、自分を肯定的に捉え、人生を楽しめる子どもを育んでいきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

東小では、**「あさひ相談室」**（中校舎１階の保健室です）という部屋を設置し、養護教諭が担当しています。児童や保護者の皆様、悩みや相談事がありましたらご利用ください。電話の相談でも結構です（TEL：0266-41-0066）。